

自然と運命

—— “Macbeth” の世界 ——

両角克夫

I 欲望の根源としての生

自然は人間に様々な欲望を与えているが、その根柢は、生物としての宿命、即ち個体維持と種族維持の神秘的とも云うべき先天的衝動である。これは宇宙的な生への盲目的意志とも云うべきものであろう。この意志は人間にあって強く働き、人間を操る見えない糸である。この生への盲目的意志は、人間にあっては多様に変貌し、意識的無意識的を問わず人間の行動を形成する。尚、思想と呼ばれるものも、生の意識面への反映であり反省であるが、意志や感情は更に親密に生に直結している。人間は、異常に発達した脳細胞と神経組織をもつが故に、過去幾千年に亘って多種多様な観念建築を構築し続けて来たが、如何にそれらが観念的、抽象的なものであっても生の変形であり metamorphosis にすぎないであろう。人間にとって生からの脱出も、より自由な生への志向にもとづく。すべての思想、イデオロギイは、個と種と類の生存の自覚、その存続と発展を志向する夫々の状況下に於ける意識形態であり、個と種と類の相互依存関係と、無機的有機的外界との調和的關係は、人間の生存に不可欠のものとして、体験され、その繰返される経験の記憶は、伝説となり記録となって蓄積し、有能な人物達によって整理され洗練され、更には未来への行動のための指導原理となって来た。これが科学であり、哲学であり、宗教であった。一口に言うならば、Homo sapiens を特徴づける sapientiaこそ生を導く灯であり人類文化の中核をなすものである。

科学は多様な現象を自らの視点から蒐集し整理し更には法則と呼ぶ仮説を作ることによって雑多な現象を一元的に把握し、制御せんとするものである。哲学は個別科学に於ける夫々の法則の根柢を問うことによって、それらの背後にある原理を問い、宇宙や世界の存在のための仮説を設定せんとする。又既成の宗教は、人間の生の事実から出発し、如何に生き行動すべきかを価値論的に展開し、心理的安定を得るために、変化と多様を超えた唯一絶対者又は空を仮定し、相対的な有機的存在の浮動的不安感又は無常感からの脱出を計らんとする。科学も哲学も宗教も人間の生から発生し、生の意識面を形成しつつ生の充実と前進への指針となるアンテナの機能を演ずるものと云えよう。

では芸術や、中間芸術としての文学は人間の生存にとって如何なる位置を占め又その機能は如何なるものか。今ここに、17世紀初頭に英国というヨーロッパの一地方で、Shakespeareと呼ばれる才能によって生産され、主として London の民衆によって消費され、以後再生産され繰返し上演されて来た劇 “Macbeth” に例をとって人間の根源的生と文学との連関を考察してみたい。

Ⅱ 生 と 文 学

人間も生物である限り、個体維持と種族維持のための闘争を免れ得ない。個人と個人、民族と民族、国と国、階級と階級の間に見られる様々な闘争は、生存競争の metamorphosis にすぎない。これは、イデオロギー相互間の対立となり、思想間の対立は戦争の導火線ともなる。これは人間が生物である限り免れ得ない悲劇であり宿命でもあろう。然し人間はかかる悲惨な状況にさらされ、かかる現実の規定されているが故に、何らかの慰めと心理的安定を求めてやまない。

かかる努力の現れの一つが文学である。文学は人生の縮図であり、人生の断面でもある。作家は構想力によって現実をより生々しく再現し、作品として固定することによって現実の悲惨を超えようとする。読者は作家の創作の心理を追体験することによって人生の悲惨を心理的に処理せんとする。これがアリストテレスの主張する catharsis である。然し一方、作家は希望の世界を描くことによって現実に於て充たされない欲望の心理的代償を志向する。現実に於て充たされない欲望には libido があり、権力欲や名声などもあるが、更に高次のものとしては倫理的、美的、宗教的欲求もある。文学作品はこれらの人間的、心理的要求に応じて製作され、追体験され消費されるものである。では Shakespeare の “Macbeth” はこれらの人間的欲望にどのように応えているか。

Ⅲ “Macbeth” は自然の鏡

“Macbeth” は人間の権力への欲望の発生とその盲目的独走、破滅、の過程を扱っている。そこには事件としては何も珍しいものはない。古今東西、人間の社会には極めてありふれた現象である。つまり自分の立身出世のためには、邪魔になる他人を排除せんとする意志は総ての人間の心底に潜むものであり、自己の自由は他人の不自由、他人の自由は自己の不自由となる¹。人間は独りで存在出来ない故に、他と共存しなくてはならず、そのためには自己の権力欲や支配欲を抑制しなくてはならない。克己こそ、社会生活に必要な理性的要請であり、倫理の根柢をなすものであろう。この盲目的な権力欲と理性又は社会的習慣 (ethos) としての秩序又は契約との間の緊張と葛藤が “Macbeth” の世界である。

Shakespeare に於ては自然 (nature) は多義的であり、その二面性つまりその秩序と破壊性の矛盾と克服が、“macbeth” とほぼ同時代に製作された “King Lear” の主題でもあった²。然し結局、Shakespeare に於ては、“Macbeth” でも、“King Lear” でも秩序の回復によって劇が終るのであり、これは Shakespeare の自然観が中世の自然法に根ざしたものであり、世界は存在の鎖によって秩序づけられたものとして彼の劇作の中に示唆されていると云えよう³。

Shakespeare は Hamlet に語らせる。

“...any thing so o'erdone is from the purpose of playing, whose end both at the first, and now, was and is, to hold as 'twere the mirror up to nature to show virtue her own feature, scorn her own image, and the very age and body of the time his form and

pressure…” (“Hamlet” Act III. Sc. II.)

人間の本性や時代の姿を示す鏡としての劇は、人間の理想と同時に現実を再現し定着しなくてはならない。そこでは、存在と意味とが結合して創作を可能にする。

Macbeth は野心家の一つの典型であり、その内部に於ける欲望と理性、自と他、個と社会の対立と相剋が自己を悲劇的破滅に導くのである。

Ⅳ “Macbeth” の寓話

Shakespeare の顔は中世と近世の両方に向っている Janus である。中世とは秩序と克己の象徴であり、近世とは自我の開放と anarchy の象徴である。Shakespeare は近世の進行方向に対して悲観的であった。つまり楽天的な進歩主義ではなかった。中世的秩序の崩壊を実感しながらも、そこから何か新しいものが生れて来ると云う確信はなかったのであろう。この暗い不安が、“Hamlet” “Macbeth” “King Lear” などの重苦しい悲劇を生んだのであり、Shakespeare はわずかに中世的秩序の回復を暗示することによって、この暗さから遁れようとしたのである。従って “Macbeth” を中世からの寓意劇の系列に於て考えるならば、中世と近代、秩序と自我、が野心家の典型 Macbeth の内部で葛藤しながら織りなす劇がこれであると考えることが出来る。

尚、これを更に押し進め抽象化するならば、“Macbeth” は個と種又は類の寓話である。つまり族長としての Duncan を暗殺することによって原始社会からの人間社会の禁止 tabu を犯したのであり、それは一族の混乱を引起したのである⁴。

Macbeth は妻と共謀して近親者にして王である Duncan を暗殺し、完全犯罪を意図して更に殺人を続けるのであるが、その胸中には絶えず tabu を犯したという恐怖感が残存し、他に発覚することによって獲得した自らの地位が崩壊するのではないかという不安に悩まされ続ける。この辺の心理については、Macbeth と Lady Macbeth は相異を示しながらも両者に共通なものがあり、その犯罪心理の細かい取扱いは迫真的近代的で、ドストエフスキーの「罪と罰」の主人公ラスコルニコフを思わせるものがある。

しかし、Macbeth や Lady Macbeth に於ける不安は、キリスト教的意味での罪の意識でもなく、又良心の呵責でもない。それは殺人の発覚と自己の失墜に対する恐怖なのである。しかもこの恐怖そのものが、犯罪の反復と発覚を促進させていく。その無駄のない筋と心理の急速な運び方は “Macbeth” に対して Shakespeare の他の作品には類を見ない程の表現の強さを与えている。この劇はまさに勝れた心理劇なのであって、witches, Banquo の Ghost, 動く Birnam wood, 其他超自然的な要素はすべて Macbeth の心理に関連した象徴的意味を有するものである。この劇の筋はスコットランドの歴史物語りから採られ、かつ一般の歴史に見られるありふれたものであるが、主人公の心理の取扱いの的確さはこの劇の大きな魅力となっている。

Ⅴ 運 命

運命はすべて盲目的な力として人間を支配する。然し運命は外から働く場合と内から働く

場合があり、例えばソポクレスの「オイディプス王」其他のギリシャ悲劇に於ては運命は外から来る不可抗力的なものであるが、“Macbeth” 其他の Shakespeare の悲劇では主人公の内部から来る衝動と性格が相まってその主人公の運命を決定する。ギリシャ人の世界では moirai としての三人の女神, Klotho, Lachesis, Atropos によって人の一生は即ち誕生と生涯と死が支配されると考えられていたが“Macbeth” に登場する三人の Witches も weird 即ち古代英語 *wyrd* (運命) の化身であり、更に *wyrd* は *weorthan* と類語であって、それは *become*, *werden* 即ち盲目的な生成を意味する言葉である。人間の意志如何にかかわらずそうなる行く意味である。ただしギリシャの運命神は外から人間を操るのに反して“Macbeth” の Weird Sisters は Macbeth の内部に潜む野心に働きかけ、彼の意志を通して彼の行動と運命を決定していくのである。Macbeth は Lady Macbeth の虚栄心にそそのかされて Duncan 暗殺の行為に踏み切るのであるが、一たび殺人を犯すや次から次へと殆んど無反省に自己に不利益となる人物を殺していく。T. S. Eliot はその“Thomas Middleton” 論で“The Changeling” の女主人公 Beatrice について論じ“...what constitutes the essence of the tragedy... is the 'habituatio' of Beatrice to her sin; it becomes no longer merely sin but custom. Such is the essence of the tragedy of “Macbeth” — the habituation to crime.” と云っている⁵。

Macbeth の運命を決定するものは実に彼自身の内部から来る欲望と行為であって、一つの行為は次の行為を生み、それはやがて習慣となり、習性 (ethos) となって人間の性格 (ēthos) を決定する。逆にこの性格がその人の運命を決定することになる。ここには、近代的な運命観がある。つまり人間の運命は外部的環境のみでなく、与件としての自然からの選択つまり自由を媒介として形成されるということである。そして近代に於ける自由の自覚は、自我の解放、即ち欲望の解放に向って進み、それは飽くことなき権力欲、情欲、物や金の欲、又知識欲への道を開くものであり、この欲望達成のためにあらゆるものが手段化され人間は何時かこの自己の欲望の奴隷となって、破滅に向って行く。それは無限地獄であって、如何なる瞬間に於ても満足 (contentment) は得られず、唯々不満と不安と焦燥の中に在る不幸そのものである。これが近代の悲劇の様相であり、イギリスルネッサンスに於ては、例えば Marlowe や Shakespeare の劇作がかかる欲望の果てを見事に描いてみせたのである。

Macbeth が Duncan を殺して王位についてからも、Lady Macbeth は決して幸福ではない。発覚の不安にとりつかれ遂には自らの生命を絶つ。

Nought's had, all's spent,

Where our desire is got without content:

'Tis safer to be that which we destroy,

Than by destruction dwell in doubtful joy.

—Act III. Sc. II. —

そして殺人の罪を重ねていく間に、あの剛直な“man”⁶ Macbeth は殺人が習慣となり、全く事務的に計画的に着々と仕事を進め恐ろしさも感じなくなる。実直と慢心は人間を機械にする。

I have almost forgot the taste of fears.

.....

Direness, familiar to my slaughterous thoughts,

Cannot once start me.

— Act V. Sc. V. —

さらに、Lady Macbeth の自殺の報を耳にした Macbeth は、暗い権力欲の奴隷となって来たそれまでの自己の生涯を振り返って、はじめての如く、その無意味さを悟るのである。

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,
 Creeps in this petty pace from day to day,
 To the last syllable of recorded time;
 And all our yesterdays have lighted fools,
 The way to dusty death. Out, out, brief candle!
 Life's but a walkig shadow; a poor player,
 That struts and frets his hour upon the stage,
 And then is heard no more: it is a tale
 Told by an idiot, full of sound and fury,
 Signifying nothing.

(Act V. Sc. V)

これは死を嘲り、智慧を喪失し、ただ野望と慢心にかかられて生きて来た Macbeth の到達点、即ち絶望と虚無を示すものである。勿論この台詞は Macbeth には出来すぎたものであり、ギリシャ悲劇ならコーラスの歌うものである。

VI “Macbeth” の心理的効果

“Macbeth” は1040年に Duucan 王を殺してスコットランド王になった歴史上の Macbeth をモデルにして作られた劇であるが、手段を選ばない欲望の達成は決して contentment をもたらさない。煩惱から生れる業は、輪廻となって巡り、人間をとりこにはなさない。煩惱は人間の智慧をくもらせて、真実を隠蔽してしまう。然しこれは凡人の悲劇であり、生そのものの苦悩なのである。凡人 Macbeth の一生は象徴的である。

我々は実生活に於ては働く者であって、生きるために精一杯であり、自己の姿を眺め、人生の意味を考える機会を得ることは困難である。然し、勝れた劇はそれを可能にしてくれるのである。Macbeth にはギリシャ悲劇に於て感じられるような、主人公に対する pity はないが、terror はある。そして、この terror は外から来るものではなく、人間の内部に潜む野望の残虐さである。ギリシャ悲劇の与える心理的効果は、外部から来る運命に対する諦念に基づく catharsis であるが“Macbeth” の場合は、人間社会の自然法的秩序を破った者の破滅と、その秩序の回復が dramatic justice であって観客に poetic justice の慰めを与えるのである。

自然は人間に自由の余地を残し、選択の可能性を与えている。従って人間は生きるためには何かを選ばなくてはならない。そしてその選択がその主体の未来を決定し運命となっていく。では人間を“contentment” の方向に導く選択は如何にして可能であろうか。自然法的秩序に反する選択は個体を滅ぼすのであって、人間の意志は不断に智慧と謙虚さによって導かれなくてはならぬ。“Macbeth” は野望によって盲目となり、智慧を喪失し、秩序に反して自滅の道を進んだ愚かな人間の悲劇である。

この劇の場面は Scotland であり、登場人物もケルト系の名前をもつ。witches や動く森は、

暗い中世的な神秘感を通じて Macbeth の深層心理を描くのに成功している。生への盲目的意志から生ずる生存競争，そこから派生する盲目的な権力意志と支配欲，これは人間が生物である限り免れ得ない衝動であるが，人間は本来的に社会的集団的存在であり，又異常に脳髓の発達した生物であることも相まって，類又は種の意識としての *sapientia* を獲得した。この *sapientia* は，経験の記憶から出発し，言語其他の伝達的手段を通じて，過去から現在へと集団的に伝承されて来た情報を内容とするものである。そしてそれは，生活の智慧として *tabu* となり，戒律となり，契約となり，倫理となり，慈悲や愛の宗教ともなった。*tabu* は現代人にとっては様々に変貌しているが，潜在意識として存在し，利己的な欲望の独走に対してブレーキとなっている。然し一方，ここでは様々な *complexes* が生じ，*libido* は *mortido* へ，*erōs* は *thanatos* への転換も見られる。

“Macbeth” は実に生と死の間中存在としての人間悲劇であり，筋としては中世の王位争奪を外衣とした単純のものであるが，その心理的扱いは極めて冷静で近代的である。この劇によって我々の内なる Macbeth を感ぜざるを得ない。

Ⅶ む す び

“Macbeth” の世界は，ストア的自然法秩序の世界であって，それに反逆するものはやがて自滅していく。それが運命なのである。そして Macbeth” の暗さは Lady Macbeth の台詞にある如く “contentment” の喪失又彼女の自殺を耳にした Macbeth の台詞に表現された如くこの世の無意味さであり，この絶望的虚無感は神の不在に結びつくものである。まさにこれは現代の精神的心理的風土でもある。

我々現代人は，まさに Macbeth 夫妻と等しく *libido* と *mortido*，*erōs* と *thanatos* の間を彷徨う存在である。煩惱と執着の描く輪の世界から遁れるためには，*libido* と *mortido* を超えた世界が必要なのである。究竟的な “contentment” は，*libido* や *mortido* とは異った次元でのみ得られるのではないか。

西欧的近代に於ける我の自覚の出発を17世紀フランスの哲学者 Descartes⁷ の中に見出すことが出来るが，更に遡って5世紀初頭の Augustinus の中にその先駆者を見出すことが可能である。Augustinus は西欧の思想的父であると同時に，近代的「我」の自覚の出発点をなすものでもあった。彼はその自伝 “Confessiones” (c. 400) の最初の頁で告白する。

“……quia fecisti nos ad te et inquietum est cor nostrum; donec requiescat in te. ……”

参考文献と註

- Shakespeare の “Macbeth” からの引用はすべて、
MACBETH, edited by Kenneth MUIR (Methuen & co. London, 1962).
からであり、又 “Hamlet” からの引用は HAMLET, edited by John Dover WILSON (Cambridge, 1969).
からである。
- (1) J.-P. Sartre: L'être et le néant (nrf. paris, 1943).
 - (2) 両角克夫：自然と救済— King Lear の主題を求めて—(信州大学紀要, 1974).
 - (3) E. M. W. Tillyard : The Elizabethan World Picture. (Chatto & Windus, 1943) pp. 37—102.
Arthur O. Lovejoy : The Great Chain of Being, (Harper & Row, New York, 1960).
 - (4) Freud : Totem und Tabu, 1912.
 - (5) T. S. Eliot : Selected Essays, (Faber and Faber, London, 1966) p.164.
 - (6) “Macbeth” の中で 'man' は二様の意味で用いられている。例えば, Act I. Sc. VII.
— I dare do all that may become a man; Who dares do more, is none.
この Macbeth の台詞に対して次の Lady Macbeth の台詞がある。
— What beast was't then, / That made you break this enterprise to me ?/ When you
durst do it, then you were a man;
 - (7) Descartes : Discours de la méthode.

Summary

Nature and Destiny — A Study of "MACBETH" —

by Katsuo MOROZUMI

This tragedy represents the eternal conflict between desire and tabu.

The blind will to life, power, and vanity is unavoidable inasmuch as we are living beings. But Nature has given us free-will with which we must choose our way of living and behavior, and so in turn our choice determines our destiny. Therefore we can say that the world consists of Nature and our choice which make our history and future.

The Macbeths could not attain their contentment after all, and their disillusion is the theme of "Macbeth". They made their own history and destiny which did not lead them to "contentment".

Shakespeare's psychological description in this tragedy is so minute and vivid that we each can find a Macbeth within us who are the miserable moderns yearning after genuine contentment in vain. Even now, every time we read "Macbeth", the tragedy appeals to us afresh because it is very suggestive of the destiny of the moderns and our age.